

主宰論説 47

人類生き方思想史原論—哲学と宗教と芸術と科学の歴史的流れについて—
(全面的見直し版)

かけがえのない地球と人類と生物の共存・共栄により、千年紀、いや一万年紀を切り開くためには、これまでの人類史で重要な役割を果たし、今後も大きな影響力を持つと考えられる哲学と宗教と芸術と科学について、相互の関連性も含めて、その歴史的流れと系譜を考えてみるのも、悪くはないし、重要であると考えられる。太古の昔から、多くの人間は、生と死を見つめながら、人生を問い、生きがいと健康と寿命に思いを馳せながら、これらと深い関わりを持ってきたと言えるからである。ただ、人は、生きる過程で、大波小波に見舞われ、ジグザグコースを歩まざるを得ない場合も多い。その際、改めて「夢と希望」が、たくましく生き抜き、「生命讃歌」を奏でる重要な動機（モチベーション）となったと考えられる（パンドラの箱の最後に残っていた「希望」が、艱難辛苦を乗り越えて、生き抜く力となったと考えられる）。国境、宗教、時代を超えて、人類史上に燦然と輝く、【**生き方の金字塔**】ということを考えておくのも悪くはないし、有用かと思われる。

人類がこの地球上に現れ、洞窟から抜け出して、平地で居住を始めた頃、吹き荒れる嵐などの大自然の猛威の前では、ほとんど無力状態で、とてもそれらを克服できるような状況にはなかったと思われる。もともと大自然は、決して人間に優しいものではなく、むしろ、その立ち入りを拒絶し、遠ざけるものであった。けれども、火と道具と言葉という3大発明を駆使し、持ち前の頭脳を発揮して、大自然を、人類と共存できる半自然に変えることが出来るようになっていったと考えられる（火の上手な使い方、食材が豊富になり、猛獣を制御できるようにもなったが、使い方を誤ると、火災などの大惨事を招き易い）。それでも、狩猟・漁撈による食料確保という生活形態では、持続可能な余剰生産力は、期待できず、日々の生活で手一杯であり、人生に思いを込めるとか、この世の仕組みに思いを巡らすなどの余裕は、なかったと思われる。農耕・牧畜（および商・工業）による定住型社会への移行とともに、持続可能な余剰生産力も生まれ、「生きるとは?」、「死ぬとは?」というような根源的な問いも、考えるようになっていったと言えるだろう。

その過程で、先ず、哲学が生まれる。哲学というと、最初に浮かぶのは、ギリシア時代の自然哲学である。「万物の根源は水である。」と唱えたタレースや、「万物の根源は、原子である。」と唱えたデモクリトスで代表される「万物の根源は、土・空気・水・火の4元素の組み合わせからなる」とする、自然哲学のイオニア学派らで代表される（文献1；ウィペデキア日本語版）（これらは、想念的な物活論で、近代以降の実験的な実証性には乏しい嫌いはあるが、元素に関する先駆的な考えであったと思われる）。次いで、ソクラテス、プラトン、アリストテレスのギリシア中期の三大哲学者の道徳哲学である（文献2：加藤信朗著『ギリシア哲学史（新版）』、東京大学出版会（2024.8））。近代に入って、ルネ・デカルト、ブレース・パスカル、パールーフ・スピノザ、ゴットフリート・ライプニッツの流れの大陸合理論（文献3：サイモン・クリッチリー著『ヨーロッパ大陸の哲学』、佐藤透訳、岩波書店（2004.6））と、フランシス・ベーコン、トーマス・ホッブス、ジョン・ロックの流れのイギリス経験論（文献4：『イギリスの経験論哲学』、改訂新版 世界大百科事典、平凡社（2007）から、「純粋理性批判」、「実践理性批判」、「判断力批判」で知られる、旧プロシアのケーニヒスブルグ出身のイマニュエル・カント（文献5：ウィキペディア日本語版、彼は、別に、『永遠平和のために』という論述も、残している。）に始まり、ヨハン・ゴットリーフ・フィヒテ、フリードリヒ・シェリング、ゲオルク・ウィルヘルム・フリードリヒ・ヘーゲルによって完成されるドイツの観念論（文献6：『ドイツ観念論哲学』、改訂新版 世界大百科事典、平凡社（2007）を経て、フリードリヒ・ニーチェ、セーレン・キェルケゴールから、ジャン・ポール・サルトルまでの実存主義哲学に到るようだ（文献7：『実存主義哲学』、改訂新版 世界大百科事典、平凡社（2007））。少し毛色が違うが、アメリカでは、ウィリアム・ジェームズ、トーマス・デューイの実用主義（プラグマチズム）という独特の哲学の流れがあるようである（文献8：鶴見俊輔『アメリカ哲学』、こぶし書房（2008））。日本では、「諸学の基礎は、哲学にあり。」と言った、井上哲治郎（了）、「善の研究」で知られる西田幾多郎（京都哲学派のひとり、アメリカの実用主義の哲学の影響もあると言われていたようである）（文献9：西田幾多郎著『善の研究』、岩波文庫（2012））、「人生論ノート」を著した三木 清などの流れがあるようである。もともと、「生と死」を主要テーマとした論説も、古今東西いろいろなものがあり、宗教のテーマにもなっているが、小説の中で論じたのは、ロシアのドストエフスキーが最初であり、その後、ほとんど誰もいないと思われるようである（文献10：フォードル・ドストエフスキー著、『罪と罰』、1866年）。

宗教については、分派も含めて、多種多様なものがあり、論ずるのは、憚れるところも有り、異論も多いと思われるが、避けて通れないと思われるので、あえて、考えを述べてみたい。ユダヤ教、キリスト教、イスラム教の三つの重要な宗教は、いずれも、中東の砂漠地帯を起源とする“砂漠の民”の一神教のようである。また、もう一つの大き

な宗教である仏陀の“仏の道”も、もともとは、“草原の民”の教えであるようだ。昔のヘレニズム時代のバクトリアの故地のガンダーラ地方で起こったクシャナ朝のカニシカ王時代を起源とする衆徒救済を特徴とする大乘仏教が、タクラマカン砂漠のオアシス経由で北伝し、アジアの各地に広まったようである。もう一つの自力更生を特徴とする小乗仏教は、南伝の形で、東南アジア諸国に広まったようである。別に、中国固有の無為自然を説く道教、インド固有のヒンズー教、旧ペルシア固有の二神論に立つ拝火教（ゾロアスター教）（文献11：松本清張が、『火の路』、文春文庫(2010)）で、日本までの伝来過程を論じているようである。北九州市松本清張記念博物館所蔵、世界各地で見られる山岳信仰（日本の山伏信仰も、その系譜である。）などが上げられる。農耕社会や漁撈社会、森林社会や山岳および海洋社会では、大部分は、色々な自然のものに精霊が宿るという精霊崇拜（アニミズム）の考えを基礎とする多神教の方が多いようである。北欧神話では、オーディンを主神とする多神教だし、ギリシア神話では、ゼウスを主神とする多神教だし、日本の神道も、天照大神を主神とする多神教である。どちらも、信仰対象が違うだけで、人間の思考を超えたものの存在を認めることと位置づけられていたものようである。

芸術の系譜と流れについても、少しは、述べてみたい。黎明期の頃から、人間は、日々の生活の合間に、絵などを描いて、自分が目にして印象に残ったものを、芸術として、残そうとしてきた。古くは、アルタミラの洞窟やラスコーの洞窟の動物の壁画が知られている（文献12：ラスコー洞窟壁画、世界史の窓、教材工房(2010)）。また、自然石および加工石、埴輪、土偶などの形で示される原始彫刻がある。ただ、一口に芸術といっても、絵画、彫刻、陶芸、建築などの造形美に関するアポロンのものもあるし、和楽、西欧音楽、世界各地の民謡など、聴覚に由来する陶酔美に関するディオニソスのものもある。能・狂言、歌舞伎、踊りなどの中間的なものもある。世界各地には、地域、民族固有の特色ある芸術も多い。ただ、世界史を眺めると、「美の巨人達」も、西洋芸術と東洋芸術に大別されるようである。絵画に特定してみると、西欧の印象派画家のクロード・モネ、フィンセント・ファン・ゴッホ、抽象画の巨匠パブロ・ピカソ、中国の南宋画の馬遠、夏珪、日本の水墨画画家の雪舟、襖絵画家狩野永徳、富岳三十六景等の葛飾北斎、日本の風景画家の横山大観、日本の近代美人画家の東西の巨匠といわれる上村松園と鏗木清方（文献13：ウィペディア日本版）など、この類の人は、枚挙に暇がない。もともと、絵画や彫刻は、偶像崇拜の禁止の教えで、青色のモスクという建築芸術を除いては、ほとんど目立った名作が見られないイスラム圏を除き、宗教的な教えを目に見えるようにして、その教えを普及させようという意図とそれへの協力の形で発達したようである。キリスト教教会の天地創造のフレスコ絵や聖母マリア像や、仏教における仏陀像や観音菩薩像が、その系譜である。彫刻では、ミケランジェロ・ブオナローティのダビデ像や、シルクロードの敦煌、雲崗における石窟仏像が上げられる。日本では、法隆寺金堂の釈迦三尊像（文献14：『釈迦三尊』（魅惑の仏像3）、毎日新聞社(1986)）などが、上げられる。ルネッサンス時期では、宗教からの解放と人間讃歌をテーマとしたいろいろな絵画や彫刻が開いた。ラッファエロ・サンティ、ミケランジェロ・ブオナローティのキリスト教会の円天井に描かれた、天地創造に関わる天使らの群像の天井画、レオナルド・ダ・ビンチの最後の晩餐やモナリザ像が上げられる（これらの絵画に関しては、いくつかの謎もあるようである；文献15；ロバート・ラングドン著『ダ・ビンチ・コード』、角川書店(2004)）。建築では、ロマネスク、バロック、ゴシック様式の流れがある。建造物としての芸術性だけでなく、その文化的背景を考える必要があるようである。ヨーロッパ各地のいろいろな宮殿、教会、城郭に反映され、多様性に富んでいるようである。

また、科学（最近では、技術と表裏一体をなすので、科学技術とひとくくりにした方が良いのかもしれないが、本来は、自然界の諸々の現象や仕組みに対する法則性、あるいは森羅万象に内在する成り立ちの機構に対する知的好奇心の対象として、科学があるので、技術とは、やはり別にして考えるべきものと思われるので、科学ということにしたい。）（ただ、工学となると、科学的知見をもとにして、創意・工夫により、技術的革新を目指し、人類に有用なものや技術を提供し、生活等を便利にするという目標があり、自然に対しても、ただ融合するだけでなく、そのきしみ等の改善を図ることを目標にする面もあるようである。熱力学に見られるように、科学は、工学から多くの恩恵を受けた逆の例もある。多くの科学法則は、現象の理解と説明のための仮説に過ぎないと言われる。その中で、唯一、厳然とした法則として確定しているのは、熱力学第二法則のエントロピーの法則だけだと言われるようである。また、いろいろな物理的量のばらつきを考慮しないと、信頼性が得られないということで、統計力学が必要になる（文献16：岡部 豊著、『熱・統計力学』（朝倉物理学選書4、朝倉書店(2008)、また、物理学と化学の境界領域として、化学物理および物理化学があるようである。）についても、新たな視点から、少し、考えてみたい。ニコラウス・コペルニクス、ガリレオ・ガリレイに始まる近代科学（文献17：ガリレオ・ガリレイ著、『新科学対話』田中一郎訳、岩波文庫（上・下）(1987)）は、いろいろな流れを経由しながら、現代科学に至るようだ（文献18：アイザック・ニュートン著、中野猿人 訳『プリンシピア—自然哲学の数学的原理』、講談社(1977)、文献18：ジェームズ・クラーク・マクスウェル 著、竹内薫 訳『電気論の初歩』、シャムハトプレス(2006)、文献19：朝永慎一郎著、『量子力学と私』、岩波文庫(2010)、文献20：真船文隆著、『量子化学』、東京化学同人(2007)、文献21：谷口尚司著『材料工学のための移動現象論』、東北大学出版会(2001)、文献20：化学便覧基礎編 改訂版第6版、第12章、反応速度式と速度定数、日本化学会(2004)、文献22：相対性理論と量子論、佐藤勝彦監修、PHP研究所(2006)。科学と文学の接点というの、あるかと思われる。昔、詩人ゲーテが、水ガラスの溶液に、鉄、コバルト、ニッケルなどの鉄属イオンを加えると、青色、エメラルド色、瑠璃色などの、美しい沈殿が生じる事を知り、非常に魅了されたという逸話が、残っているよ

うである（文献24：ヘルマン・マイヤー著『「水ガラス」奥田 進訳、コロナ社(1950)、文献25：ケミカル・ガーデン；ウィペデキア日本語版）。ただ、科学も、自然科学だけでなく、人文科学、社会科学もあり、その裾野は、かなり広いようだ。欧米型の科学は、哲学や宗教からの脱却を目指して発達したものである。知的好奇心を満足させ、この世の法則性を解き明かし、物質的な豊かさと日常生活の利便さを提供し、人に幸せをもたらしたという。ある程度、大量生産、大量消費、大量廃棄型の物質文明と生産体系に支えられ、人類に未曾有の繁栄をもたらした功績は、大なるものがあるようだ。しかし、昨今、地球環境問題、資源・エネルギー問題、廃棄物問題、人工知能（AI）問題など、いろいろな問題が露呈し、持続可能な開発目標（SDGs）への実効性のある有効対応も含めて、大きな見直しが必要になっているようだ。連携、協奏、融合等が唱えられることもあるが、哲学と宗教と芸術と科学は、時折相互作用を通じて接近することがあっても、今後も、競合し、相互に影響を受けながらも、平行して進むものかもしれない。

自由短歌：

山川海恵みと猛威相半ばされどもなつかしゆりかごのもと

自由短歌

人たるに燦然と残った文化遺産火道具言葉が支えし人類史

令和7年5月12日初稿

令和7年5月13日脱稿

令和7年5月17日再脱稿

令和7年5月21日再修正

令和7年6月2日大幅見直しと再修正・再構成

令和7年7月11日全面的見直し

令和7年8月9日夜引用文献明示

令和7年8月13日夜文章の校正と引用文献の精密チェック改訂

令和7年8月23日文献の通し番号と刊行年の再度チェック版

令和7年8月27日夕方文献の通し番号と刊行年及び整合性の再度チェック版

令和7年8月28日夕方文献の通し番号と刊行年及び整合性の再々チェック版

令和7年8月29日正午引用文献の精査化と通し番号のチェック、引用人名の姓名の明示化

令和7年9月4日午後引用文献の精査化と通し番号のチェックおよび引用人名の姓名の明示化最終チェック

令和7年9月7日午後 引用文献と人名の再校正

令和7年9月9日夕方 引用文献の刊行元・刊行年および引用人名の姓名の精査